

論文

対人苦手意識の生起と相互作用の過程に関わる社会的スキル - 一般的他者に対する社会的スキルと 苦手な他者に対する社会的スキルにおける質的差異の検討 - ^{*1}

日向野 智 子^{*2}

問 題

特定の他者との関わりにおいて、居心地の悪さや相性の悪さを感じたり、その対象者となるべく関わりたくないと思ったりするようなことは、日常的に誰もが経験していることであろう。日向野・堀毛・小口（1998）は、このような特定の他者に対する否定的な感情と消極的な態度の総称を対人苦手意識として概念化している。対人苦手意識は、不快感やわずらわしさなどの感情と、自他の行動や評価に対する懸念を伴う（日向野・小口，2002b）。そのため、苦手な他者との関わりにおいて回避的反応が示されやすく（日向野他，1998）、対人苦手意識は、対人関係にネガティブな影響を及ぼしやすいといえる。

対人苦手意識とは対照的に、対人関係にポジティブな影響を及ぼす個人差要因として社会的スキルがあげられる。社会的スキルは、対人関係を円滑に運営する能力であり、学習可能であるという（相川，2001）。社会的スキルについては、多くの学術的定義がなされているながらも（e.g., Libet & Lewinsohn, 1973 ; Argyle, 1981）、その内容は、研究者によって異なるのが現状といえる（cf., 堀毛，1990；相川，2001）。しかし、社会的スキルは、他者との円滑な対人関係を築き、効果的に相互作用し、関係を維持していくための適応能力であるという、共通した見解が多くの研究においてみられる。また、適切な対人的行動をとるためには、社会的な受容と個人の社会的適応を前提として、個人が社会的スキルを備えていることが重要であることが指摘されている（大坊，2005）。

堀毛（1994）は、個人のコミュニケーション全般に対応する印象管理能力の個人差をもたらす要因として、記号化、解読、統制の3次元から成る基本スキルを仮定している。記号化は、「自分の意図や感情を相手に正確に伝えるスキル」、解読は、「相手の意図や感情を正確に読みとるスキル」、統制は、「感情をコントロールするスキル」として、それぞれ概念化されている（堀毛，1994）。他者との関係において互いのメッセージを過不足なく授受するためには、相手の感情や希望を正確に読みとるという入力要因（解読）と、自分の気持ちや主張を的確に伝えるという出力要因（記号化）の双方が必要である。さらに、自分の感情を適切に表出する、あるいは感情や本心が露呈しないよう気を配るというコントロール（統制）の要因も求められる。コミュニケーションの基本には、記号化、解読、統制のような過程が

* 1 本研究の一部は、日本パーソナリティ心理学会第16回大会（2007年、於帯広畜産大学）にて発表された。

* 2 立正大学心理学部

存在することが、さまざまな研究 (Zuckerman & Larrance, 1979; Riggio, 1986; 和田, 1992) の中で指摘されている。これらの基本スキルは、状況を超えた対人コミュニケーション全般において、対人的目標をスムーズに達成するために求められる能力であると考えられる。

上述したような対人苦手意識と社会的スキルについて、日向野 (2007a) は、両者の関連を検討している。社会的スキルの指標として、堀毛 (1994) の基本スキル概念を用いた研究によると、苦手な友人との関わりにおける記号化スキルの高さは、対人苦手意識のわずらわしさを高めることが見出されている。苦手な人とはなるべく関わりたくないと思いつつも、記号化スキルが高いと、相手との相互作用のなかで自己表出し、適切なコミュニケーションをとるよう促されるのかもしれない。そのため、記号化スキルが高いほど、苦手な人との相互作用にともなうネガティブな感情を体験しやすくなり、わずらわしさが高くなると推察される。また、同研究では、記号化スキルの低さは、苦手な人に対する受容的なつきあい方を低下させることも示している。

しかし、このような対人苦手意識と社会的スキルとの因果関係の捉え方については、疑問が残る。日向野 (2007a) では、苦手な同性の友人に対する社会的スキルが、対人苦手意識にどのような影響を及ぼすのかということを検討しているが、両者について因果関係を想定するのであれば、対人苦手意識が苦手な同性の友人に対する社会的スキルに影響を及ぼすと考えの方が妥当であろう。橋本 (2006) は、対人苦手意識や怒り、罪悪感のように、ネガティブ感情にまつわる研究について概観したところ、これらのネガティブ感情に共通する点として「他者との関わりを通じて、自分が身体的・物理的・心理的に有している好ましい何かが損なわれる (もしくはその可能性がある) ときに、われわれはその対人関係をネガティブに評価する」と述べている。苦手な人とのコミュニケーション時は、対人苦手意識を覚えるがゆえに、いつもどおりにふるまうことができず、自分自身の好ましい対人イメージや、本来身につけている社会的スキルが損なわれたような状態が生じやすいであろう。また、このような状態に陥りやすいほど、対象者との関係はネガティブに知覚され、対人苦手意識を覚えたり、対人苦手意識が原因となって、社会的スキルを発揮できない状態に陥ったりするのではないかと考えられる。

そこで、改めて対人苦手意識と社会的スキルとの関連を考えてみると、二つの関連が浮かび上がる。一つ目は、対人苦手意識の生起過程に関わる関連である。社会的スキルは他者との良好な対人関係を築くために必要な個人特性であるといわれることから、社会的スキルの乏しさが原因となり、対人苦手意識が生起すると考えられるであろう。二つ目は、苦手な他者との相互作用に関わる関連である。苦手な人との相互作用では戸惑いや不快感を覚えやすいため、相手に対して消極的、回避的になりやすい (日向野他, 1998)。また、苦手な人とのコミュニケーションにおいては、自己の役割が混乱しやすいことも報告されている。したがって、苦手な人との相互作用時に働く社会的スキルは、対人苦手意識によって負の影響を受けると考えられる。

目的 上述した対人苦手意識と社会的スキルとの関連についての知見から、本研究では、一般他者に対する社会的スキルが対人苦手意識の生起に影響を及ぼすという、対人苦手意識の生起過程と、対人苦手意識が苦手な人との関わりにおける社会的スキルに影響を及ぼすという、対人苦手意識の相互作用過程とを分けて考える。その上で、対人苦手意識と社会的スキルとの関連を再検討することを主たる目的とする。

また、日向野 (2007a,b) における対人苦手意識と社会的スキルに関する研究結果は、女性を対象と

した検討に基づいている。そこで、本研究では、対人苦手意識と社会的スキルとの関連について、性差を含めた検討を試みる。さらに、苦手な人の有無により、対人苦手意識の強さや社会的スキルの高さに差がみられるのかについても、性差と併せて検討していく。

方 法

調査対象者 2007年1月中旬、都内私立大学において、講義に出席した学生を対象に調査を実施した。分析対象者は、男性60名（年齢 $M = 19.66$, $SD = .96$ ）、女性49名（年齢： $M = 20.23$, $SD = 1.51$ ）であった。

調査票の構成 はじめに年齢と性別をたずねてから、同性の友人と日ごろどのように関わっているのかについて、日向野（2007a,b）と同様に、堀毛（1994）の ENCODE - DECODE2を評定させた（以下より ENDE2と略記）。同尺度は、解読、記号化、統制の3つの基本スキル15項目によって構成されており、堀毛（1994）によって、信頼性、妥当性ともに十分であることが確認されている。

次に、苦手な友人の有無について尋ねた。苦手な友人がいると回答した対象者については、同性・異性にわけて、苦手な友人の人数も記入してもらった。その後、最も苦手な同性の友人を思い浮かべるよう指示し、苦手な友人に対する感情（15項目）およびつきあい方（11項目）の各尺度（日向野他（1998）を一部修正）を評定させた。感情尺度は、相手に対する率直な不快感や憤りなどを含む、他者否定的な「わずらわしさ」と、相手にどのように接すればよいのか、相手は自分のことをどのように思っているのかに意識が向きやすい「懸念」から成る。一方、つきあい方の尺度は、積極的な関わりを避けようとする「消極的な態度」や、相手の苦手なところを個性と認め、友好的な関係を築こうと努力をする「個性の容認」が抽出されている。

さらに、同性の苦手な友人との関わり方についても、ENDE2を回答するよう求めた。その際、同性の苦手な友人がいない対象者については、過去に苦手であった同性の友人を想起して回答するよう求めた。

なお、使用した尺度は、対人苦手意識と社会的スキルとの関連を検討した日向野（2007a,b）と同じものを用いた。

評定方法 いずれの尺度についても、当てはまる（5点）～どちらともいえない（3）～当てはまらない（1点）の5件法により評定させた。

結果と考察

苦手な人の有無と苦手な人の人数 Table 1に、現在苦手な人があると回答した対象者と、現在苦手な人はいないと回答した対象者の度数を示す。各セルの人数について、対象者の有無（2）×性別（2）の²検定を行ったところ、各セルの人数比率に有意な差はみられなかった。

また、Table 1において苦手な人があると回答した対象者について、苦手な人数の中央値を算出した（Table 2）。苦手な人の人数は、男女ともに、異性よりも同性の方が多く報告された。

Table 1 苦手な人の有無についてのクロス集計

	男 性	女 性
苦手な人がいない	14	19
苦手な人がいる	46	29

注：表中の値は、人数を表す。

Table 2 苦手な人数の中央値

苦手な対象	男 性		女 性	
	同 性	異 性	同 性	異 性
中央値	2.00	1.00	1.50	1.00
25パーセンタイル点	1.00	0.75	1.00	0.00
75パーセンタイル点	3.00	2.00	3.00	2.00

注：表中の値は、人数を表す。

苦手な同性の友人および同性の友人に対する ENDE2の分析 (1) 因子分析結果の概要と信頼性係数
 同性の友人および同性の苦手な友人それぞれに対する ENDE2尺度について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。Table 3の通り、いずれの友人についても、「記号化」・「解読」・「統制」と解釈できる因子が抽出された。第1因子として抽出されたのは、同性の友人については記号化スキル、苦手な同性の友人については解読スキルであった。因子間相関については、苦手な同性の友人に対する解読と記号化スキルとの間に中程度の相関 ($r = .52$) がみられたが、他の組み合わせにおける相関は弱かった。また、記号化・解読・統制の各スキルについて Cronbach の信頼性係数を求めたところ、苦手な同性の友人については、 $\alpha = .72 \sim .84$ の十分な値が得られた。同性の友人についてはやや低く、 $\alpha = .62 \sim .70$ の信頼性係数が示された。

(2) 因子パターンの特徴からみた各スキルの特徴 因子パターンをみると、それぞれの因子に含まれる項目は、苦手な同性の友人、同性の友人において共通であった。しかし、各スキルにおいて高い因子負荷量を示した項目には違いがみられる。まず、記号化スキルでは、対象者にかかわらず、「自分の気持ちを表情や目に表す」に対して高い負荷がみられた。また、同性の苦手な友人においては、「言わないつもりでいることをつい口に出す」に対してもっとも高い負荷量が得られたが、同性の友人に対しては、同項目への負荷量は低かった。これらの差異から、苦手な同性の友人に対する記号化スキルは、苦手な人に対する否定的な感情や自分自身のガティブな内的状態の露呈という要素を反映していると考えられる。次に、相手の意図や感情を正確に読み取る解読スキルを検討すると、同性の友人では、「言葉がなくても相手のいいたいことがなんとなくわかる」、苦手な同性の友人では、「相手が自分をどう思っているか読みとる」、「相手のしぐさから気持ちを読みとる」という項目が、それぞれ高い負荷量を得ていた。同じ解読スキルであっても、同性の苦手な友人に対する解読スキルのほうが、苦手な人からみた自分の印象や評価について注意を向けて解読しようという傾向がみられる。さらに、統制スキルについては、「自分を抑えて相手に合わせる」という項目への負荷量が、苦手な同性の友人では高いのに対し、同性の友人では低かった。この結果から、苦手な同性の友人に対する統制スキルは、同性の友人に対する同スキルよりも、抑制的な自己コントロールスキルとして働くと解釈した。

Table 3 基本スキル (ENDE2) の対象者別因子分析表

項目番号・項目	同性の友人				同性の苦手な友人			
	F1	F2	F3	共通性	F1	F2	F3	共通性
1 自分の気持ちを正確に相手に伝える	<u>.36</u>	.07	.24	.20	.11	<u>.61</u>	.04	.45
2 相手のしぐさから気持ちを読みとる	-.09	<u>.48</u>	.24	.34	<u>.75</u>	-.03	.03	.54
3 自分の気持ちや感情をコントロールしながらつきあう	-.21	-.06	<u>.62</u>	.45	.09	-.03	<u>.58</u>	.35
4 会話をうまくすすめる	.17	.06	<u>.41</u>	.20	.32	-.08	<u>.40</u>	.28
5 話をしている相手の気持ちのちょっとした変化を感じとる	-.02	<u>.47</u>	.22	.33	<u>.74</u>	-.01	.11	.57
6 自分を抑えて相手にあわせる	-.10	.03	<u>.47</u>	.25	-.18	.07	<u>.83</u>	.66
7 感情を素直にあらわす	<u>.64</u>	-.01	.10	.40	.19	<u>.63</u>	-.01	.55
8 言葉がなくても相手の言いたいことがなんとなくわかる	.12	<u>.71</u>	-.08	.54	<u>.64</u>	.01	.05	.42
9 気持ちを隠そうしても表にあわられる	<u>.67</u>	-.14	-.13	.46	-.02	<u>.61</u>	.09	.36
10 身振りや手振りをうまくつかって表現する	.33	.06	<u>.43</u>	.29	-.09	.40	<u>.45</u>	.29
11 嘘をつかれても見破ることができる	-.05	<u>.48</u>	.00	.22	<u>.61</u>	.20	-.11	.54
12 言わないつもりでいることをつい口に出す	<u>.38</u>	.10	-.20	.22	-.05	<u>.74</u>	-.11	.54
13 自分の気持ちを表情や目にあらわす	<u>.76</u>	-.03	.00	.56	-.02	<u>.72</u>	-.05	.51
14 相手が自分をどう思っているか読みとる	-.05	<u>.67</u>	-.19	.39	<u>.75</u>	.02	-.05	.57
15 相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度にださない	-.01	-.09	<u>.64</u>	.39	.09	-.15	<u>.67</u>	.50
因子の解釈	記号化	解読	統制		解読	記号化	統制	
因子間相関	F1	1.00			1.00			
	F2	.28	1.00		.52	1.00		
	F3	-.11	.31	1.00	.13	-.09	1.00	
Cronbach の信頼性係数 ()	.68	.70	.62		.84	.81	.72	

注：各下位尺度の信頼性係数は、下線部のみの項目を使用し算出した。

(3) 苦手な同性の友人に対するスキルと同性の友人に対するスキルとの関連 因子パターンを検討したところ、対象者によって記号化、解読、統制の各スキルのもつ意味は質的に異なると考えられる。そこで、日ごろの対人関係における社会的スキルと、苦手な人に対する社会的スキルとは関連するのかを検討するために、両者の相関係数を求めた。その結果、記号化は $r = .39$ ($p < .01$)、解読は $r = .53$ ($p < .01$) 統制は $r = .37$ ($p < .01$) であり、同じ尺度項目から構成されるスキルであっても、両者の関連は高くはないことが明らかになった。この結果により、日ごろ良好な友人関係を築けるか否かということに関わるスキルと、苦手な人と適度な関係を築けるか否かということに関わるスキルについては、やはり、異なるスキルとして捉えるべきであろう。日向野 (2007a,b) では、苦手な同性の友人に対する記号化、解読、統制の各スキル得点は、同性の友人に対する同スキル得点よりも有意に低いことを示している。しかし、日向野 (2007a,b) の研究においては、対象の違いによって社会的スキルが異なるのかという質的な検討はなされていないため、結果の信頼性について問われるところである。

対人苦手意識の感情とつきあい方尺度についての分析 対人苦手意識の感情とつきあい方の各尺度に

ついて、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、感情尺度については、他者に対する率直な不快感や否定的感情を含んだ「わずらわしさ」($\alpha = .83$)と、評価懸念や自己否定的な要素を含んだ「懸念」($\alpha = .81$)の2因子解が得られた (Table 4)。これらの因子は、相手へのネガティブ評価に伴う不快感 (わずらわしさ) と、相手からのネガティブ評価に対する不快感 (懸念) として大別されると考えられる (橋本, 2006)。

一方、つきあい方尺度については、苦手な相手を理解し回避することなくつきあおうとする「受容的」なつきあい方 ($\alpha = .79$) と、対照的に、あたり障りのないよう深入りせずにつきあおうとする「表面的」なつきあい方 ($\alpha = .77$) の各下位因子が抽出された (Table 5)。日向野 (2007) の分析結果においては、同尺度は3因子構造がみられたが、本研究においては2因子解が妥当であると判断した。

性差と苦手な人の有無による対人苦手意識および社会的スキルの検討 (1) 対人苦手意識 対人苦手意識における感情およびつきあい方の各下位尺度得点 (平均項目得点) について、苦手な人の有無 (2) と性別 (2) を要因とする2要因の分散分析を行った。その結果、感情尺度におけるわずらわしさ得点について、苦手な人の有無と性差の交互作用が有意であった ($F_{(1,104)} = 4.99, p < .05$)。Figure 1のとおり、苦手な人がいない条件における女性のわずらわしさ得点は、他の群にくらべて低く示された。これに対して、苦手な友人がいない男性のわずらわしさ得点は高く、現在苦手な友人がいる男女と差異はみられなかった。これまでの研究結果では、中学生 (日向野・小口, 2002a)、高校生 (日向野・小口,

Table 4 苦手な人に対する感情尺度の因子分析表

項目番号・項目	因子負荷量		
	F1	F2	共通性
第1因子：わずらわしさ ($\alpha = .83$)			
1 イライラする。	<u>.79</u>	-.02	.62
2 相手のことなど考えたくもない。	<u>.72</u>	.04	.52
12 その人との関わりにストレスを感じる。	<u>.71</u>	.07	.51
13 イライラしたり、動揺したりする自分が嫌になる。	<u>.59</u>	.41	.52
10 どうしてそうなんだろうと、相手に文句を言いたくなる。	<u>.57</u>	.01	.33
4 ゆううつで、つまらない気分になる。	<u>.54</u>	.18	.32
5 なるべく一緒にいたくないと思う。	<u>.51</u>	.11	.27
第2因子：懸念 ($\alpha = .81$)			
15 自分のことをどう思われているのだろうかと、あれこれ考えてしまう。	-.06	<u>.81</u>	.67
3 相手のことや、相手との関係を考えると、自分に自信をなくしてしまう。	.18	<u>.63</u>	.42
7 相手のことや、相手との関係を考えると、さみしい気持ちになる。	.00	<u>.62</u>	.39
14 相手にコンプレックスを感じたり、うらやましくなる。	.06	<u>.62</u>	.39
8 緊張したり、落ち着かなくなったりしてしまう。	.22	<u>.54</u>	.47
6 どういうふうに接しようかと考えてしまう。	.09	<u>.51</u>	.26
説明分散	2.97	2.73	
累積寄与率 (%)	22.85	43.61	

注：以下の2つの項目は、因子負荷量が低かったため、不良項目として分析から削除した。

9 相手の特徴が自分の中の一面のように感じる。

11 自分とは合わないからしかたがないと思う。

Table 5 苦手な人に対するつきあいかた尺度の因子分析表

項目番号・項目	因子負荷量		
	F1	F2	共通性
第1因子：受容的つきあい方 ($\alpha = .79$)			
6 相手を理解しようと努力する。	<u>.90</u>	-.01	.82
9 相手の長所を見つけるよう努める。	<u>.77</u>	.04	.59
7 嫌な面など、なるべく気にしないで付き合う。	<u>.61</u>	.23	.42
8 相手の特徴は、相手の個性だと割りきる。	<u>.57</u>	.06	.33
2 できるだけ関わらない。	-.45	.24	.26
第2因子：表面的つきあい方 ($\alpha = .77$)			
3 当たり障りのないように付き合う。	-.14	<u>.77</u>	.61
4 相手の嫌な面について、何も言わずに付き合う。	.10	<u>.74</u>	.56
1 深入りせずに、距離をたもって付き合う。	-.08	<u>.64</u>	.42
5 表面上は、仲良く穏便に付き合う。	.16	<u>.56</u>	.34
10 自分の意見をはっきり述べる。	.07	-.46	.22
説明分散	2.37	2.19	
累積寄与率 (%)	21.57	41.48	

注：以下の項目は、因子負荷量が低かったため不良項目として分析から削除した。

11 自分は自分、相手は相手だと割り切る。

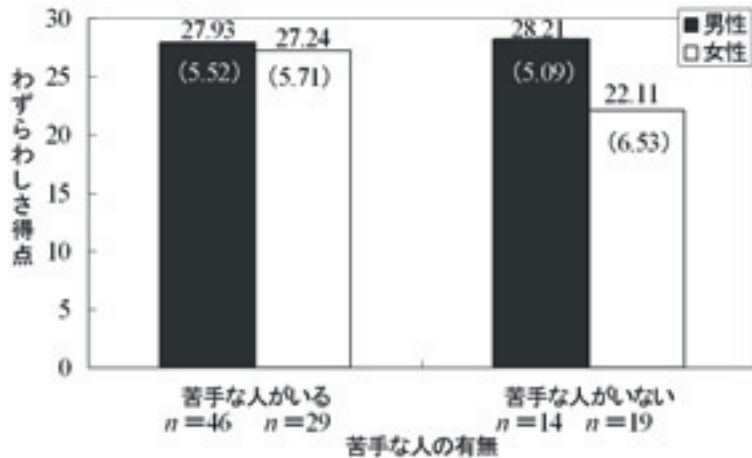


Fig. 1 苦手な人の有無と性差によるわずらわしさ得点の差異

注：図中の数値は平均項目得点を、括弧内は標準偏差を示す。

2002b)、大学生（日向野・小口，2002b）のいずれについても、対人苦手意識の性差はみられないことが示されている。現在の対人苦手意識については、本研究でも従来の同様の結果が得られたが、過去に苦手であった同性友人との関係を想起させた場合には、女性よりも男性のわずらわしさのほうが高かった。過去の対人苦手意識やネガティブな感情について、男性は女性よりも鮮明に想起しやすいといえるのか、今後の検討が必要である。

(2) 同性の友人に対する社会的スキルと苦手な同性の友人に対する社会的スキル 同性の友人との対人関係における解読、記号化、統制の各スキル得点（平均項目得点）についても、苦手な人の有無（2）と性別（2）による2要因の分散分析を行った。その結果、苦手な人の有無の有意な主効果が得られ（ $F_{(1,104)} = 5.42, p < .05$ ）、日常的な同性の友人との関わりにおける記号化スキルは、現在、苦手な友人がいない対象者（ $M = 15.97, SD = 3.58, n = 33$ ）よりも苦手な友人がいる対象者（ $M = 17.84, SD = 3.40, n = 75$ ）のほうが高いことが明らかになった。この結果によると、日ごろの友人関係においては、苦手な同性の友人がいる人のほうが、いない人よりも、表情豊かに、自分自身の感情や気持ちを表出していることになる。社会的スキルの低さが、ネガティブな対人関係上の特性や、問題に結びつく、というこれまでの知見によって説明するのであれば、苦手な同性友人がいる人の方が、いない人よりも記号化スキルは低くなると考えられる。しかし、本研究では逆の結果が得られたことから、日ごろの対人関係における自己表出のスキルが良好であるとしても、対人的な苦手意識は生起すると考えられる。したがって、対人苦手意識を覚える人の日常的な対人スキルは低いわけではないこと、さらに、日常的な基本的スキルの低さが、必ずしも対人苦手意識に結びつくわけではないことが、本研究においても見出されたというであろう。

同様に、同性の苦手な友人に対する解読、記号化、統制スキル尺度得点（平均項目得点）についても、苦手な人の有無（2）と性別（2）を要因とする分散分析を行った。しかし、いずれの尺度得点についても、苦手な人の有無の主効果、性別の主効果、および交互作用ともに有意ではなかった。

対人苦手意識の生起と相互作用過程に関わる社会的スキルの検討 対人苦手意識の覚えやすさや生起については、日ごろの社会的スキルの低さが関わる一方で、ひとたび対人苦手意識を覚えてしまった後には、対人苦手意識が苦手な同性との関わりにおける社会的スキルに負の影響を及ぼすと予測される。そこで、以下のように回帰分析を行った。

(1) 対人苦手意識の生起過程に影響を及ぼす社会的スキル 社会的スキルが対人苦手意識に及ぼす影響を検討するために、同性の友人に対する解読、記号化、統制の各スキル得点を予測変数、対人苦手意

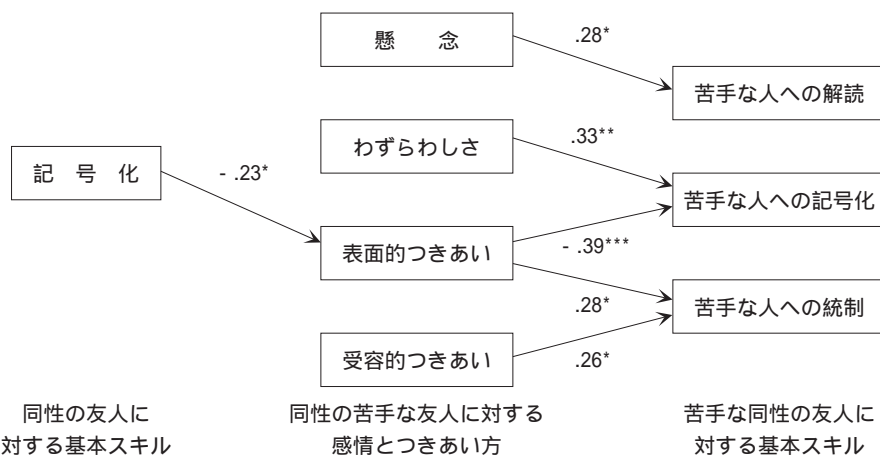


Figure 2 日ごろの社会的スキル・対人苦手意識・苦手な同性の友人に対する社会的スキルについてのパス図

注1：図中の値は標準偏回帰係数である。

注2：* $p < .05$, ** $p < .01$

識の感情とつきあい方における下位尺度得点を目的変数とするステップワイズ回帰分析を行った。その結果、対人苦手意識における表面的なつきあい方について、記号化スキル得点が有意な予測変数として選出された ($\beta = -.23, p < .05$)。日ごろの社会的スキルが対人苦手意識に影響を及ぼしたのは記号化のみであり、同スキルの低さは、苦手な同性友人に対する表面的なつきあい方を高めることが明らかになった。自分の感情や考えを表出することが不得手な場合、コミュニケーションそのものを回避しやすくなり、互いの関係が好転することも悪化することもないような、表面的なつきあい方につながると考えられる。しかし、記号化スキルの低さが、苦手な同性の友人に対する受容的なつきあい方や、対人苦手意識のわずらわしさや懸念を高めるといった負の影響はみられなかった。同様に、対人苦手意識に対する解読・統制スキルの影響も示されていない。したがって、日ごろの対人関係のなかで発揮される社会的スキルは、対人苦手意識を形成する個人差要因として強い影響をもたないことが示唆されたといえよう。また、高度な社会的スキルを身につけることが良好な対人関係を築くものと考えられてきたが、社会的スキルの低さが、必ずしもネガティブな対人関係や対人感情に結びつくわけではないことも、このような結果から示されるのではないだろうか。

(2) 対人苦手意識が苦手な他者との相互作用過程で働く社会的スキルに及ぼす影響 続けて、対人苦手意識が苦手な同性の同級生との相互作用における社会的スキルに及ぼす影響について、対人苦手意識の感情とつきあい方における下位尺度得点を予測変数、苦手な同性の友人に対する解読、記号化、統制スキル得点を目的変数とするステップワイズ回帰分析を行った。前述した結果と合わせて、回帰分析の結果をパス図に示す。Figure 2のとおり、対人苦手意識の感情とつきあい方におけるすべてが、同性の苦手な友人に対する記号化・解読・統制のスキル得点に対する有意な予測変数であることが示された ($\beta = \pm .26 \sim .39, p < .05 \sim .001$)。

一方、苦手な同性の友人に対する感情とつきあい方はすべて、苦手な友人との関わりにおける記号化・解読・統制のスキルに影響を及ぼしていた。Figure 2のパス図をみると、目的変数であるわずらわしさの効果について、特徴がみられる。わずらわしさは、苦手な同性の友人に対する記号化スキルに対して正の標準偏回帰係数を示しており、記号化スキルを促進することが見出された。わずらわしさは、相手へのネガティブな評価を主とし(橋本, 2006)率直な不快感を覚えるものである。このわずらわしさが苦手な同性の友人に対して自分自身を素直に表そうとする記号化スキルを促進するということは、パス図中の他の結果からも矛盾するように考えられる。しかし、因子分析の結果(Table 1)を検討したところ、苦手な同性の友人に対する記号化スキルは、ポジティブな内的状態の表現ばかりではなく、ネガティブな感情の露呈や表出を含意していた。そのため、わずらわしさが高いほど、苦手な同性の友人に対して自身の内面的な対人苦手意識が、表情やしぐさ、パラ言語などの非言語コミュニケーションや直接的な会話となって表れやすくなると考えられるであろう。すなわち、わずらわしさの高さは、苦手な同性友人との関わりにおける社会的スキルを阻害する要因であるとみなされる。

また、懸念が高いほど相手の気持ちを読みとろうとするスキルが高まることも明らかになった。懸念は、苦手な他者からの否定的評価に対するネガティブな反応を特徴としている。そのため、苦手な相手が自分のことをどのように思っているのかという解読スキルを高めることにつながるであろう。さらに、表面的なつきあい方は、苦手な同性友人とのかわりにおいても記号化スキルと関連し、同スキル

を低くする傾向がみられた。その一方で、表面的なつきあい方は統制スキルを高くする。また、受容的なつきあい方についても、統制スキルを高めるという結果がみられた。表面的なつきあいが多く苦手な同性の友人に深く関わらないのであれば、相手に対するネガティブな感情が顕在化することも少ない。しかし、表面的なつきあいといえども、苦手な相手と関わらなくてはならないときには、相互作用にもなってネガティブな感情が露呈してしまったり、相手のネガティブな反応を引き起こしてしまったりする可能性が生じる。そのため、自分を抑えて相手の反応に合わせるよう、自己をコントロールすることが求められると考えられる。

総合考察 本研究の結果から、日ごろの対人関係における社会的スキルと、苦手な他者との関わりのなかで働く社会的スキルには、質的な差異がみられると言えるであろう。苦手な同性友人に対する社会的スキルは、露呈を含んだ感情や気持ちの表出（記号化）、解釈は相手の気持ちや自分に対する評価の知覚（解読）、統制は自己のネガティブ感情のコントロール（統制）という特徴を持つと考えられる。一般的に、社会的スキルは他者との円滑な対人関係を築くための能力であり、ポジティブな対人関係を得るために発揮されるという見解について一致がみられる。しかし、本研究における苦手な同性友人に対する社会的スキルは、ポジティブな対人関係の形成に働く個人差要因というよりも、自他ともにネガティブな感情を生じないよう働きかけ、よりネガティブな対人関係への進行を防ぐために働く個人差要因であると解釈できる。また、本研究では、堀毛（1994）の記号化、解読、統制から成る基本スキル尺度を用いて社会的スキルを測定した。基本スキルは、状況を越えた対人コミュニケーション全般にかかわる能力を指す概念である。しかし、苦手な他者との対人場面を想定させた基本スキルの評価は、状況特定のであったといえるかもしれない。したがって、日ごろの対人関係における社会的スキルと、苦手な他者に対する社会的スキルについて質的な差異がみられた背景には、このような対人的状況の違いが存在すると考えられる。

日ごろの対人関係における社会的スキルが対人苦手意識の生起に及ぼす影響は、苦手な他者との表面的なつきあい方に対して示されたのみであり、その影響は高いものではなかった。また、日ごろの友人関係における記号化スキルについては、苦手な同性の同級生がいる人の方が、いない人よりも高いことが示されている。したがって、対人苦手意識の生起過程については、相手の性格特性に対する認知（日向野・小口，2002a）や、コンプレックスなど（日向野他，1998）、社会的スキル以外の個人差要因が、比較的大きな影響を及ぼしているといえるであろう。

一方、苦手な他者との関わりにおける社会的スキルについては、対人苦手意識におけるわずらわしさや懸念、表面的または受容的なつきあい方が、多くは正の影響を及ぼすことが見出された。しかし、苦手な他者に対する記号化スキルは、「言わないつもりであることを口に出す」といったネガティブな対人相互作用につながる特徴を有している。わずらわしさや表面的なつきあい方が高いほど記号化スキルが高いということは、対人苦手意識をもっていると、苦手な人とのネガティブな対人相互作用を軽減するスキルを損ねてしまうという負の影響を示唆していると考えられる。

社会的生起過程モデルに基づく社会的スキルでは、社会的スキルは、対人目標との関係で効果性と適切性を備えていなければならないという（相川，1996）。効果性とは、対人目標が達成され、他者との関係が肯定的になることである。また、適切性とは、対人目標の達成方法が、等の対人場面や状況にふ

さわしいことである。苦手な他者との関係における効果性とは、ネガティブな感情の体験や、負担となる相互作用を低減し、お互いにネガティブな影響を与えないことであろう。また、苦手な他者との関係における効果性とは、苦手な他者との関係には深入りせずに、適度な距離を保つことであると考えられる。このように考えると、本研究で得られた苦手な他者に対する社会的スキルの特徴は、苦手な他者と適度に、また適切に関わっていくための、目標志向的な印象管理能力の個人差、といえるであろう。

引用文献

- 相川 充 1996 社会的スキルとは何か 相川 充・津村俊充（編）社会的スキルと対人関係 - 自己表現を援助する - 誠信書房 pp3 - 21.
- 相川 充 2001 人づきあいの技術 - 社会的スキルの心理学 - サイエンス社
- Argyle, M. 1981 The nature of social skill. In M. Argyle (Ed.), *Social skills and health*. Methuen, pp1 - 30.
- 大坊郁夫 2005 社会的スキル・トレーニングの概念と方法 大坊郁夫（編）2005 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション ナカニシヤ出版 pp1 - 15.
- 橋本 剛 ストレスをもたらす対人関係 2006 谷口弘一・福岡欣治（編）対人関係と適応の心理学 北大路書房 pp1 - 18.
- 堀毛一也 1990 社会的スキルの習得 斎藤耕二・菊池章夫（編）社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp79 - 100.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116 - 128.
- 日向野智子 2007a 苦手な友人に対する社会的スキルと対人苦手意識との関連 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報 4, 95 - 98.
- 日向野智子 2007b 対人苦手意識が社会的スキルに及ぼす影響 同性の苦手な友人と同性の友人との比較 日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 150 - 151.
- 日向野智子・堀毛一也・小口孝司 1998 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 43 - 62.
- 日向野智子・小口孝司 2002a 中学生における対人苦手意識 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 406 - 407.
- 日向野智子・小口孝司 2002b 対人苦手意識の実態と生起過程 心理学研究, 73, 157 - 165.
- Libet, J. & Lewinsohn, P. 1973 The concept of social skill with special reference to the behavior of depressed persons. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 304 - 312.
- Riggio, R. E. 1986 Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 649 - 660.
- 和田 実 1992 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要第1部門(教育科学), 43, 123 - 136.
- Zuckerman, M. & Larrance, D. T. 1979 Individual differences in perceived encoding and decoding abilities. In R. Rosenthal (Ed.) 1979 *Skill in nonverbal communication: Individual differences*. Oelgeschlager.